

函館着

高田さんは、復員後公職追放令により教職を追われ、しばらく家業のビロード業を手伝っておられたが、独立して洋服店を開業され、経営と共に自治会長を十五年の永きにわたり勤められて地域の発展に尽くされ、現在全抑協長浜支部の役員として活躍しております。

(滋賀県 村田 健造)

労苦のこと

兵庫県 橋本文雄

生年月日 大正九(一九二〇)年四月十日

家族構成 祖母、父、母、弟二人、妹二人

学歴 昭和十一(一九三六)年三月、中川原村立

尋常高等小学校卒業

兵歴 昭和十五年十二月一日、大阪歩兵第二二部

隊(元第八連隊)入隊

(昭和十五年八月徴兵検査「第三乙種」合格)

昭和十六年三月末ごろ、中支派遣北野部隊森田隊へ。大阪港より南京上陸。一週間後、漢口へ転進。夜行軍により応城県番加集の警備に当たる。六月ごろから長沙作戦に参加し、九月中ごろ、北野部隊に内地へ帰還命令受領し、上海へ上陸。対岸の南通において、敵前上陸訓練を六カ月実施。(訓練は、揚子江のドロ水の中、大型鉄舟を用い、連日猛訓練であった)

昭和十七年三月に入り、夏服受領。リンガエン湾(フィリピン)上陸。隊は、トラックに分乗し、パタイン半島の米軍基地からの砲弾が切れ目なく頭上を掠める第一線に着く。京都の部隊がやられた後と知り、「ここが我が命の終わりか」と覚悟を決める。

中旬のころ、ジャングルの谷底で体を洗った際に発熱し、軍医の診断でマニラ市街の病院へ。入院中、日本軍がマニラを占領。退院後、コレヒドール島へ転送され、本隊に合流。中隊長に申告の折、退院は二十四人に減少していることを知る。復帰の翌日、隊の被服

係石坂が盲腸を発病し、入院手術の付添人として、トネル内に設けられている米軍病院へ同行し、米軍大尉の通訳で役目を果たした。(病院内の日本人は二人だけながら全く差別なく、温かく扱われたことは今も忘れることなく思い出せる)

九月ごろ、中部第二三部隊(大阪)へ帰還し、除隊の上帰郷。

昭和十八年三月、赤紙召集。姫路中部第四二部隊へ入隊。平壤(ピョンヤン)へ移動。部隊は、第四四部隊の留守隊。鳩班員に属し、ハトの世話と訓練半年。

昭和十九年十月、秋乙第五一部隊(毒ガス隊)へ転属し、終戦を迎える。

入ソ年月日

昭和二十一年四月、平壤駅発車、興南港着。ロシア船で「ダモイ日本」の航路が急変し、極東ソ領のポセット港に揚げられる。二、三泊後、一隊は千八百人編成に組まれてシベリア鉄道の貨物列車で運ばれ、二十三日間の貨車輸送に耐えてカザフスタン着。その

間、昭和二十年八月、停戦後数日内にソ軍に兵器没収をされて三合里に収容される。ラジオで「もう戦争は終わった、帰れる」と思ったのに案に相違し、三合里は鉄条網に囲まれて、何と四隅の高い見張り台に自動小銃で構えたソ連兵の歩哨が立っている。捕虜扱いの始まりである。給与は、大豆や半割れのコーリヤン、カタクリ粉等になり、品切れの日は薄い塩水まがいのスープだけ。困った日々が変わったものである。各自の持つ飯盒一つが食事の用具のすべて。集団を組んで、近くの山から青い松の小枝を集め、トタン板の切れ端でバタバタとあおぎながら帰国の日を祈りつつ過ごした。

そのうちに、千人単位のグループが編成されては三合里から帰国の途にたったが、シベリア送りらしい噂。

私のグループ六十人ほどは、平壤市外の山中に点在の日本軍の弾薬庫約三〇にある未使用弾薬を小型トラックに積み、鉄道貨車へ運ぶ作業にこき使われること四カ月。弾薬が少なくなるころ、日清・日露で使っ

た大砲までも修理させられ、すべてソ連へ運び出されていた。そして、我がグループも平壤駅からソ連へ運ばれた。着いた場所は、初めて体験する砂漠の土地だ。早々から宿舍造り、川掘りの土木作業に追い立てられ、ノルマ（作業基準規定）というソ連並みの作業量でその日の出来高次第が計られて、空腹続きの身にさらに食事を三〇、五〇、七〇、一〇〇及び一〇〇%などと差のつく制度には、もともと体力差の違身には困る日々の始まりとなった。

冬期のある日、軽い傷でも出血の止まりにくい人が出るようになり、ソ連女医の要請で、軽作業者（身体検査で、尻の肉の薄い人が選別される）十人がシート運搬のトラックで砂漠を走っていると、兎を見つけた同乗の軍医が腰の拳銃で仕とめた。その辺りには亀（甲羅は黄色い）もいるらしくて、その足跡を追って、何と五〇匹余りも捕り、収容所に持ち帰り、トラックに天幕の覆いをして二日間寝かせてから料理し、体の衰弱している人に与えられ、生活の工夫を知った。

帰国年月日

昭和二十三年六月、急にダモイ（日本へ帰還）が知らされた。カザック駅からシベリア鉄道東進二十三日の貨物列車は苦にならなかつたが、終着駅のナホトカで下車、広場に整列したところ、日本人の妙なオルグの連中が現れて、いきなり「赤旗の歌」や「インターナショナル」を歌えと威丈高に叫ぶが、カザックでは毎日がノルマに追われ続きで、共産党の話など聞いたこともなく終わり、出立前にガリ版刷りで例の歌詞は受け取ったままの身では全く歌えなかつた。彼らが宣言して言う。「この部隊は共産主義になっていない。故に日本へ帰国の資格がない」と。「もう一度ソ連へ戻れ」という判決を聞いたソ連の上官（我が部隊の引率官）が、宣告の当局と一夜交渉の結果、五十人程度を残留し、その他全員帰国と決まった。不運にも私は、残留の一員に当たる。その日から五十人は古ぼけた貨物列車の一台に詰め込まれ（中は、三段の棚板で仕切る）、止まった駅付近の枕木取り替えや鉄路の修理作業に当たり、一駅が終了すると次の駅へ移動しつ

つ約半年の作業を耐え忍び、ウラジオストック駅に到着したころは、厳冬のため土は凍りつき固くて作業不能となり、残留罰はようやく終了。

昭和二十三年十二月、ナホトカ港発「第二大拓丸」に乗船。日本海の冬の大きな波に吸い込まれそうな船で初体験。生きた心地のしない緊張のひとつきも、帰国の嬉しさに酔いつつ舞鶴港に上陸できた。ヤレヤレ。

帰国後の職業

昭和十九年以降は家族との音信は途絶え、停戦後の生死も不明の家族へ突然、生きて帰って現れ、家族はもちろん、ご近所の方々に喜んでいただき、嬉しい日々が暫く続きました。

家業は農業ながら人手が足りており、自分の職業での収入を考えて、大阪の叔父が自転車の卸問屋を営業しているので相談に訪れると、「田舎で、小さくても店を出しては」との助言に力づけられ、早速、自転車の小売店を営業中の叔父の弟の店に入り、約二年間、

店員見習いで修行し、ようやく自宅の近所で自転車屋を開業した。

二十九歳で結婚することが叶い、翌年長男が誕生。現在二児の父親となり、平和な家庭を構えている。

地区の役職等

兵役、抑留中は部落に不在のため世話役につけなかったが、帰国後、父は農会の役員、部落長、民生委員を務めていました。私も結婚後、農会役員や部落会長を務められるようになり、時代とともに自転車から自動二輪車に移り、運転免許証が必要になり取得したところ、駐在さんから声がかかり、洲本警察署の会合に出席を持ちかけられた縁で、以来三十五年間、洲本市交通安全協会の役員を務めました。六十五歳の頃、宮総代を勤め、氏神様の社務所改築事業の実行副委員長としての大役を果たすことができて嬉しかった。

部落老人クラブ会長の任期中の昭和から平成に代わる年に、氏神祭礼のお神輿の新調にお手伝いできたのも思い出に残っています。

傘寿を迎えた今は、病院や指庄の先生のお世話になりながらも、ゲートボールの仲間と毎日半時のお茶を楽しみ、長男夫婦と孫三人の温かな六人家族の中で暮らしています。

【執筆者の紹介】

橋本文雄氏と私との出会いは、昭和五十四年五月に、全抑協兵庫県連洲本支部結成会の席上での会話が初対面である。私が支部長兼書記と会計を担当することとなり、現在に至る。

昭和五十七年に実施の「実態調査」により、約三十人の申告書が集まり、氏の履歴に触れる。

同氏の住所は、私の住む部落とは隣り合わせの位置にあり、徒歩で一〇分の距離と近いので、会報などの通信物は氏の自転車屋へ届けることがあり、面識が深くなった。

平成年度に入るとともに支部会員は十人以内に減少し、支部会員との交流は「中央だより」の配付でようやく保ってきた。昨年四月、支部会員に懇親会開催を

呼びかけたところ、五人の参加者が集まり、その中に橋本氏がおった。その席では各自の履歴を披露したが、中でも橋本氏の語りが一番詳しく記憶も確かで、特異な体験談に一同聞き耳を立てて相隨していたが、フィリピン時代に入る頃、会場が時間切れになり、次回を約して散会した。その後、六月に全抑協事務局より「労苦調査協力依頼」が届き、前述の懇親会参加者四氏に案内したところ、橋本氏から本件の手記が寄せられた。

同氏は、数年前から毎朝、私たちと顔を合わせる仲間になっていく。私の参加するゲートボールクラブは、当初からのメンバーが自然減少のころに、同氏他二人が、毎朝九時半から二時間のプレーに参加するようになり、氏は、今も軽トラックを運転しつつ通っている。毎日参加のメンバーは七、八人ながら、和気藹々タイムを楽しんでいます。

橋本氏は、温和で誠実な一面、内に秘める闘志に並々ならぬものがあり、ゲームで意外な展開を示しても平静で、互いに楽しむとともに、中間のコーヒータ

イムはお茶菓子に合わせたの談話で、一日に欠かせない貴重な半時を共有できる仲間です。

(兵庫県 中尾 徳男)

シベリアの悪夢 (白と黒)

白 (雪原と飢え) 黒 (炭鉱と黒パン)

和歌山県 坂本 清次郎

一、ソ満国境へ (徴兵)

粉雪が吹きすさむ漆黒の夜、軍用トラックはエンジンの音をゴーゴーと響かせて北へ北へと走る。幌ほろを被せた軍用トラックの荷台には、本年度徴兵の青年が整然と並び、座っている。昭和十八(一九四三)年一月十日、現地入営のため、北満の軍都「孫呉」の駅に集合した初年兵である。

約一時間後、軍用トラック十数台は「勝武屯」の地、関東軍第五国境守備隊の衛門をくぐる。孫呉駅にてあらかじめ指示されていた第二中隊の兵舎に案内さ

れ、明るい部屋に通され、初めて隣人の顔をつくづくと眺める。満州開拓青年義勇隊の制服姿、満鉄の制服、満拓の共和服と服装はまちまちであるが、現役兵として現地(満州)徴集の青年ばかりである。夜半と云うのに古兵による汁粉の夜食が提供され、初年兵としての第一夜を藁マットにもぐり、疲れからか熟睡する。

兵営の第一夜を起床ラッパにて起こされ、二等兵としての軍隊生活が始まる。「軍服に体を合わせる」「軍靴に足を合わせる」そんな数日が過ぎると、いよいよ軍事教練が始まる。召集兵のいない現役部隊、それも国境警備という任務なので、当初より厳しい訓練の開始である。

青年義勇隊の准幹部として日常集団訓練を経験している私にとっては、軍隊生活はその延長であり、初年兵ばかりの兵営生活は少しの苦もなく、「軍人に賜りたる勅諭」「戦陣訓」等は入営前に既に暗記し、書くことさえできた。不動の姿勢に始まり、挙手敬礼も義勇隊の基本訓練で鍛えられ、楽しい初年兵生活が始ま